



# 対談

# 学長

Yatsurou Mochida

Kenichi Urabe

# 同窓会 会長

出席者 名古屋学院大学学長 持田辰郎  
名古屋学院大学同窓会会長 占部憲一  
司会 名古屋学院大学同窓会副会長 下村直己

2002年4月、名古屋学院大学の新学長に

持田辰郎教授が就任されはや半年を経過しました。

再来年の本学創立40周年を控え、さらなる飛躍が期待される今、

持田学長は本学をどう導いていこうとされているか。

学長自らが提唱される「教育改革」とは？

これらをテーマに、持田学長と占部同窓会会長に

対談していただきました。

## 学生や社会が求める

## 大学を目指して、今こそ「教育改革」

名古屋学院大学学長として、今後どのような大学にしていきたいとお考えですか。

持田学長(以下持田に略)「私は学長に就任した当初から『教育改革』の必要性を提唱してまいりました。名古屋学院大学に求められている本質は、教育です。学生諸君を文字通り教えることが本学の使命であります。本学創立からこれまで、一貫して教育の在るべき姿を追求してきましたが、昨今この方針を変えていかざるを得ないくらい学生諸君の価値観が変わってまいりました。単位を取得して卒業するという、従来型大学生のスタイルにこだわらない学生が急速に増えているように思えます。関心のある事には取り組むが、そうでない事には興味を示さない現代の若者像とでもいましょうか。そんな氣質が垣間見えます。若者の考え方が急速に変わつてい

くのであれば、私たち大学側も教育内容を含めて、その在り方を変えていく必要があります。今の学生が大学に対して求めていることを理解し、それに合った教育を是非行っていきたい。そういう意味でこれまでの大学教育からの脱却。教育改革が必要だと考えています。

占部会長(以下占部に略)「今の学生が単位取得や卒業に対するこだわりが希薄になっているという点の他に、どこが変わったと感じられますか。」

持田「これまでの概念では大学生とはいわば大人である、という図式が成り立っていましたが、今の学生はこの流れに当てはまらなくなってきました。例えばカリキュラムの内容も含めて、学生一人一人が大学で学ぶことに興味を持ち、理解し、勉強する意義は何か納得できるようなこちら側から明確に指導していかなければ、なかなかついて来てくれない。そういう面がまっつきりと出てきています。だから、教育改革を必要なのです。今申し上げた意義を納得さ



せられたら、私たちの想像以上に勉学に励んでくれますね。」

占部「確かに勉強する内容を理解した上で講義を受ける場合と、そうでない場合では学ぶ面白さや楽しさにも雲泥の差が出てくるでしょうね。今後、カリキュラムの内容も変わっていく可能性はあり得ますか。」

持田「結果的にはそうなっていくだろうと思いますが、当面の第一優先は大学生生活のスタート時点で、学生諸君が「学ぶ喜び」を持てるようにしてあげるシステムづくりに力を注いでいます。わからなかつたことが理解できる。学ぶことは本来楽しいはずなんです。確かに学校教育は採点をつけ、成績を出さなくてはいい

ない。この点がある意味で勉強をつまらぬものに感じさせてしまう側面を持つことは否めません。しかし、私は大学教育にはある種の面白さがあると考えています。忘れかけた「学ぶ喜び」をさまざまな形で学生に提示していきたいですね。勉強の楽しさ、学ぶ喜びをわかち合ってもらえたら、各人がどんな進路を辿ろうと、どんな局面でも自分で勉強していけるだろうと確信しています。私は本学からそんな卒業生を輩出したいのです。」

占部「大学生活のスタート時点における取り組みについては、具体的にどんなことを考えていらっしゃるのですか。」

持田「米年度から、学生が入学した時点での導入教育を本格的に始める予定です。各学部学科ごとにオリエンテーションを行う段階で、講義内容はもちろん、私たちが用意したカリキュラムが何の目的で組まれ、勉強してもらったことによつてどんな知識が得られ、また社会人になった時にそれがどう役立つのかを考えてもらいます。実学的な部分を学生が理解した上で勉学に取り組めるかどうかで、学ぶ姿勢も大きく変わるはずですが、全体の把握ができていないまま、いきなり各論を勉強してもなかなか難しいものがあります。例えば経済であれば、4年間勉強して最後の段階で「経済とはこういうものだったのか」とわかるという話をよく耳にします。これではいけないと、そこが出発点でした。」

## AO入試の「生みの親」として

「今のお話を聞いているとAO入試のことを思い出しました。持田学長は入試部長時代、本学にAO入試を導入した「生みの親」でもあります。何をきっかけに始められたのですか。」



持田学長